

谷

宮沢賢治

青空文庫



檜ならわたり渡わたのこの崖がけはまっ赤でした。

それにひどく深く深く急でしたからのぞいて見ると全くくるくるするのでした。

谷底には水もなんにもなくてただ青い梢こすえと白樺しらかばなどの幹が短く見えるだけでした。

向う側もやっぱりこつち側と同じようでその毒々しく赤い崖には横に五本の灰いろの太い線が入っていました。ぎざぎざになつて赤い土から喰はみ出していたのです。それは昔山むかしの方から流れて走つて来て又火山灰またに埋うずもれた五層の古い熔岩ようがん流りゅうだったのです。

崖のこつち側と向う側と昔は続いていたのでしようがいつかの時代に裂けるか罅れるかしたのでしょう。霧のあるときは谷の底はまっ白でなんにも見えませんでした。

私をはじめてそこへ行ったのはたしか 尋常 三年生か四年生のころです。ずうつと下の方の野原でたった一人野葡萄を喰べていましたら馬番の理助が鬱金の切れを首に巻いて木炭の空俵をしよつて大股おおまたに通るかかったのです。そして私を見てずいぶんな高声で言ったのです。

「おいおい、どこからこぼれて此処らへ落ちた？ さらわれるぞ。蕈きのこのうんと出来る処へ連れてつてやろうか。お前なんかには持てない位蕈のある処へ連れてつてやろうか。」

私は「うん。」と云いいました。すると理助は歩きながら又言いいました。

「そんならついて来い。葡萄などもう棄すてちまえ。すつかり唇くちびるも齒むらさきも紫むらさきになつてる。早くついて来い、来い。後おくれたら棄すてて行くぞ。」

私はすぐ手にもった野葡萄の房ふさを棄すていつしんに理助について行きました。ところが理助は連れてつてやろうかと云つても一向私などは構かまわなかつたのです。自分だけ勝手かたにあるいて途方たつもない声で空に嘯なげぶりつくように歌うたつて行きました。私はもうほんとうに一生けんめいついて行つたのです。

私どもは柏かしわの林の中に入りました。

影<sup>かげ</sup>がちらちらちらちらして葉はうつくしく光りました。曲った黒い幹の間を私どもはだんだん潜<sup>くぐ</sup>って行きました。林の中に入ったら理助もあんまり急がないようになりました。又じっさい急げないようでした。傾<sup>けいしや</sup>斜もよほど出てきたのでした。

十五分も柏の中を潜ったとき理助は少し横の方へまがってからだをかがめてそこらをしらべていました。が間もなく立ちどまりました。そしてまるで低い声で、

「さあ来たぞ。すきな位とれ。左の方へは行くなよ。崖だから。」  
そこは柏や檜の林の中の小さな空地でした。私はまるでぞくぞくしました。はぎぼだしがそこにもここにも盛<sup>さか</sup>りになって生えているのです。理助は炭俵をおろして尤<sup>もつとも</sup>らしく口をふくらせてふう

と息をついてから又言いました。

「いいか。はぎぼだしには茶いろのと白いのとあるけれど白いのは硬<sup>かた</sup>くて筋が多くてだめだよ。茶いろのをとれ。」

「もうとつてもいいか。」私はききました。

「うん。何へ入れてく。そうだ。羽織へ包んで行け。」

「うん。」私は羽織をぬいで草に敷<sup>し</sup>きました。

理助はもう片っぱしからとつて炭俵の中へ入れました。私もとりました。ところが理助のとるのはみんな白いのです。白いのばかりえらんでどしどし炭俵の中へ投げ込<sup>こ</sup>んでいるのです。私はそこでしばらく呆<sup>あき</sup>れて見ていました。

「何をぼんやりしてるんだ。早くとれとれ。」理助が云いました。

「うん。けれどお前はなぜ白いのばかりとるの。」私がききました。

「おれのは漬物だよ。お前のうちじや蕈きのこの漬物なんか喰べないだろうから茶いろのを持って行った方がいいやな。煮にて食うんだろうから。」

私はなるほどと思いましたので少し理助を気の毒なような気もしながら茶いろのをたくさんとりました。羽織に包まれないようになつてもまだとりました。

日がてつて秋でもなかなか暑いのでした。

間もなく蕈も大ていなくなり理助は炭俵一ぱいに詰めたのをゆるく両手で押おすようにしてそれから羊歯しだの葉を五六枚のせて縄なわで



上をからげました。

「さあ戻るぞ。<sup>もど</sup>谷を見て来るかな。」理助は汗を<sup>あせ</sup>ふきながら右の方へ行きました。私もついて行きました。しばらくすると理助はぴたっととまりました。それから私をふり向いて私の腕を<sup>うで</sup>押<sup>おさ</sup>えてしまいました。

「さあ、見ろ、どうだ。」

私は向うを見ました。あのまっ赤な火のような崖だったので。私はまるで頭がしいんとなるように思いました。そんなにその崖が<sup>おそ</sup>恐ろしく見えたのです。

「下の方もぞかしてやろうか。」理助は云いながらそろそろと私を崖のはじにつき出しました。私はちらつと下を見ましたがも

うくるくるしてしまいました。

「どうだ。こわいだろう。ひとりで来ちやきつとここへ落ちるか  
ら来年でもいつでもひとりで来ちやいけないぞ。ひとりで来たら  
承知しないぞ。第一みちがわかるまい。」

理助は私の腕をはなして大へん意地の悪い顔つきになって斯う  
云いました。

「うん、わからない。」私はぼんやり答えました。

すると理助は笑つて戻りました。

それから青ぞらを向いて高く歌をどなりました。

さっきの蕈を置いた処へ来ると理助はどつかり足を投げ出して  
座すわつて炭俵をしまいました。それから胸で両方から縄なわを結んで言

いました。

「おい、起して呉れ。」

私はもうふところへ一杯いっぱいにきのこをつめ羽織を風呂敷包みのようにして持って待っていました。が斯う言われたので仕方なく包みを置いてうしろから理助の俵を押しやりました。理助は起きあがって嬉しうれそうに笑って野原の方へ下りはじめました。私も包みを持ってうれしくて何べんも「ホウ。」と叫さけびました。

そして私たちは野原でわかれて私は大威張おおいばりで家に帰ったのです。すると兄さんが豆まめを叩たたいていましたが笑って言いました。

「どうしてこんな古いきのこばかり取って来たんだ。」

「理助がだって茶いろのがいいって云ったもの。」

「理助かい。あいつはずるさ。もうはぎぼだしも過ぎるな。おれもあしたでかけるかな。」

私は又ついて行きたいと思ったのでした。が次の日は月曜ですから仕方なかったのです。

そしてその年は冬になりました。

次の春理助は北海道の牧場へ行つてしまいました。そして見るとあすこのきのこはほかに誰かたれに理助が教えて行つたかも知れませんがまあ私のものだったのです。私はそれを兄にもはなしませんでした。今年こそ白いのをうんととつて来ててから手柄を立ててやろうと思つたのです。

そのうち九月になりました。私ははじめたつた一人で行こうと

思ったのでしたがどうも野原から大分奥おくでこわかったのですし第一どの辺だったかあまりはつきりしませんでしたから誰か友だちを誘さそおうときめました。

そこで土曜日に私は藤原慶次郎けいじろうにその話をしました。そして誰にもその場所をはなさないなら一いっしょ緒しょに行こうと相談しました。すると慶次郎はまるでよろこんで言いました。

「櫛渡すなら方向はちゃんとわかっているよ。あすこでしばらく木炭すみを焼いていたのだから方角はちゃんとわかっている。行こう。」  
私はもう占しめたと思いました。

次の朝早く私も今度は大きな籠かごを持ってでかけたのです。実際それを一ぱいとることを考えると胸がどかどかするのです。

ところがその日は朝も東がまつ赤でどうも雨になりそうでしたが私たちが柏の林に入ったところはずいぶん雲がひくくてそれにぎらぎら光つて柏の葉も暗く見え風もカサカサ云つて大へん気味が悪くなりました。

それでも私たちはずんずん登つて行きました。慶次郎は時々向うをすかすように見て

「大丈夫だいじょうぶだよ。もうすぐだよ。」と云うのでした。実際山を歩くことなどは私よりも慶次郎の方がずうつとなれていて上手でした。

ところがうまいことはいきなり私どもははぎぼだしに出でつ会くわしました。そこはたしかに去年の処ではなかったのです。ですか

ら私は

「おい、ここは新らしいところだよ。もう僕らはきのこ山を二つ持ったよ。」と言ったのです。すると慶次郎も顔を赤くしてよろこんで眼や鼻や一緒にあってどうしてもそれが直らないという風でした。

「さあ、取ってこよう。」私は云いました。そして白いのばかりえらんで二人ともせつせと集めました。昨年のことなどはすっかり途中で話して来たのです。

間もなく籠が一ぱいになりました。丁度そのときさつきからどうしても降りそうに見えた空から雨つぶがポツリポツリとやって来ました。

「さあぬれるよ。」私は言いました。

「どうぞせざるぬれだ。」慶次郎も云いました。

雨つぶはだんだん数が増して来てまもなくザアツとやって来ました。檜の葉はパチパチ鳴りしづく雫の音もポタツポタツと聞えて来たのです。私と慶次郎とはだまつて立つてぬれました。それでもうれしかったのです。

ところが雨はまもなくぱたつとやみました。五六つぶを名残りなごに落してすばやく引きあげて行ったという風でした。そして陽ひがさつと落ちて来ました。見上げますと白い雲のきれ間から大きな光る太陽が走って出ていたのです。私どもは思わず歓呼の声をあげました。檜や柏の葉もきらきら光ったのです。



「おい、ここはどの辺だか見て置かないと今度来るときわからな  
いよ。」慶次郎が言いました。

「うん。それから去年のもさがして置かないと。兄さんにでも来  
て貰もらおうか。あしたは来れないし。」

「あした学校を下さがつてからでもいいじゃないか。」慶次郎は私の  
兄さんには知らせたくない風でした。

「帰りに暗くなるよ。」

「大丈夫さ。とにかくさがして置こう。崖はじきだろっか。」

私たちは籠はそこへ置いたまま崖の方へ歩いて行きました。そ  
したらまだまだと思っていた崖がもうすぐ眼の前に出ましたので  
私はぎくつとして手をひろげて慶次郎の来るのをとめました。

「もう崖だよ。あぶない。」

慶次郎ははじめて崖を見たらしくいかにもどきつとしたらしくしばらくなんにも云いませんでした。

「おい、やっぱり、すると、あすこは去年のところだよ。」私は言いました。

「うん。」慶次郎は少しつまらないというようにうなずきました。「もう帰ろうか。」私は云いました。

「帰ろう。あばよ。」と慶次郎は高く向うのまつ赤な崖に叫びました。

「あばよ。」崖からこだまが返って来ました。

私はにわかに面白おもしろくなつて力一ぱい叫びました。

「ホウ、居たかあ。」

「居たかあ。」崖がこだまを返しました。

「また来るよ。」慶次郎が叫びました。

「来るよ。」崖が答えました。

「馬鹿。」私が少し大胆だいたんになつて悪口をしました。

「馬鹿。」崖も悪口を返しました。

「馬鹿野郎。」慶次郎が少し低く叫びました。

ところがその返事はただごそごそつとつぶやくように聞えました。どうも手がつけられないと云つたようにも又そんなやつらにいつまでも返事していられないなど自分ら同志で相談したようにも聞えました。

私どもは顔を見合せました。それから俄かに恐くなつて一緒に崖をはなれました。

それから籠を持ってどんどん下りました。二人ともだまつてどんどん下りました。雫ですっかりぬればらや何かに引つかかれながらなんにも云わずに私どもはどんどん遁げました。遁げれば遁げるほどいよいよ恐くなったのです。うしろでハツハツハと笑うような声もしたのです。

ですから次の年はとうとう私たちは兄さんにも話して一緒にでかけたのです。





# 青空文庫情報

底本：「新編風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

1989（平成元）年6月10日2刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2008年10月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。



谷  
宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>